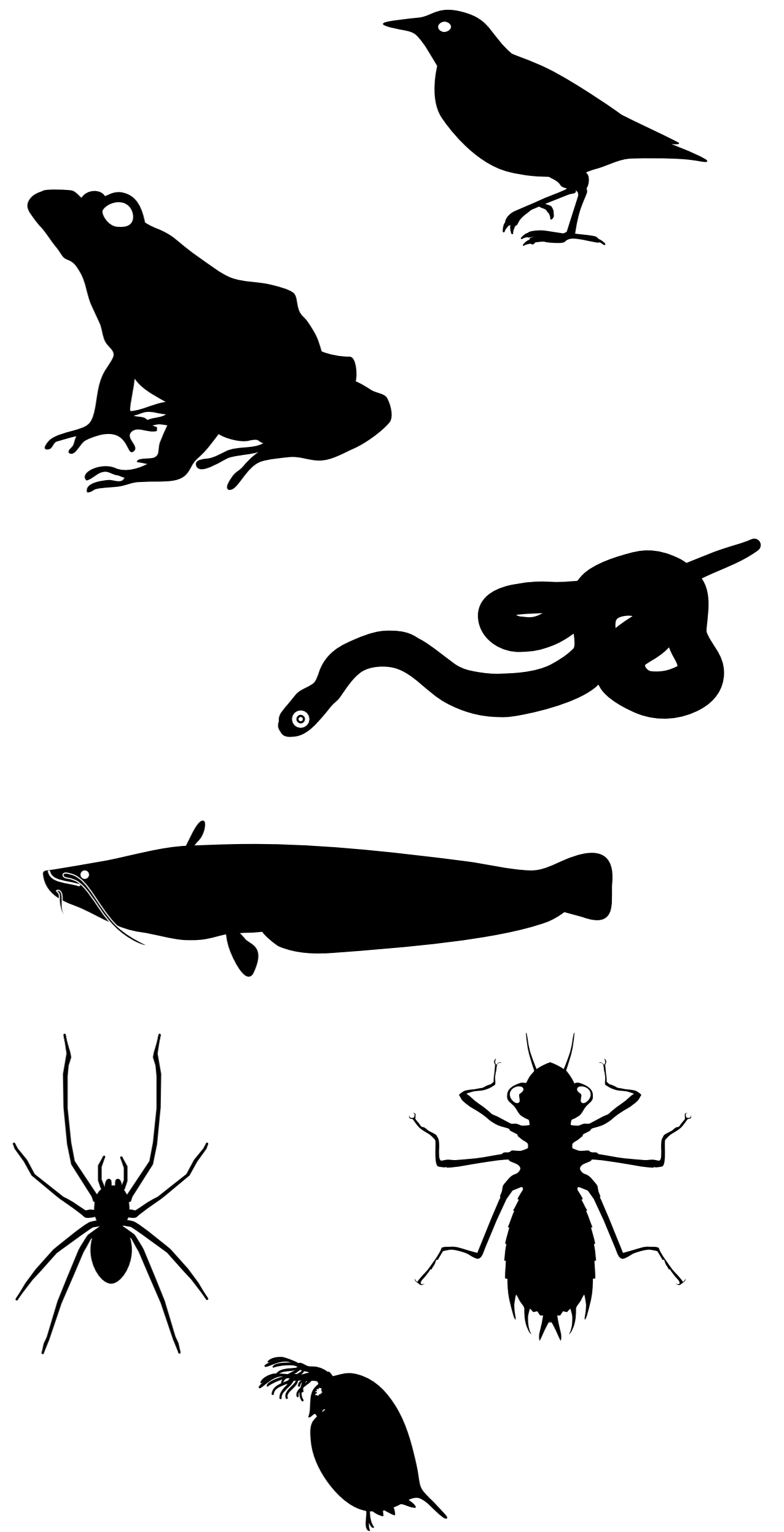


い き も の と 生 か る 田 ん ぼ と 暮 ら す



研究活動の様子



赤とんぼの採卵



土壌シードバンクの移植



オビトラップ



植生調査



ゼミ風景
(まだ学生はいません)

教育方針

当研究室では、水田の生物多様性を保全しながら農業生産活動を維持するための技術や計画手法について研究しています。

主な教育方針

- ・答えのない問いを見つけ、解決策を考える姿勢を身に着ける。
- ・現場（野外フィールド）から新たな課題を見つけ出す。
- ・粘り強く諦めず主体的に課題に取り組む。

担当科目

農村計画学/農業工学/世界の食料と農業

専門分野

水田生態工学/農村計画学/保全生態学



主な研究成果

1. 標的外生物を対象とした生態毒性評価手法の開発

OECD加盟国の標準的な生態毒性評価手法では、藻類、ミジンコ、メダカの3種を農薬の登録保留基準試験に用いています。上記3種以外の生物に対する農薬や化学物質の影響については、調べられていません。そこで、様々な生物を用いて農薬の影響評価を行い、標的外生物にリスクの小さい農薬や散布方法を提案しています。

2. 耕作放棄地を活用した水生生物の保全

日本では、耕作放棄地の面積が拡大しています。この耕作放棄地で湿地のような管理を行い、貴重な湿生植物の保全や水生生物の生息場所として活用する研究を行っています。最近では、農地開発や道路復旧のために消失する恐れのある希少植物の土壌を耕作放棄地に移植して、保全することに成功しました。

3. 熱帯性感染症を媒介する蚊の駆除技術の開発

気候変動に伴い、温帯地域の日本でもデング熱やジカウイルス熱感染症の感染リスクが高まっています。ワクチンが存在しないので、感染症を媒介する蚊を減らすことが有効な対策です。そこで、トンボのヤゴや天然資源である塩を用いて蚊の個体数を制御する方法を開発しました。